

波と風



独立行政法人国立病院機構

呉医療センター・中国がんセンター

〒737-0023 広島県呉市青山町3-1 TEL0823-22-3111 (夜間・休日 TEL23-1020)
http://www.kure-nh.go.jp 発行責任者 呉医療センター院長 谷山 清己

2016
OCTOBER

vol.37



呉医療センター・中国がんセンター 理念 Basic Principle of Our Hospital

相手の心情に寄り添う愛のある医療を
笑顔で実践します
*Practice medicine from the heart,
create smiles every day*

運営方針 Management Policy of Our Hospital

LOVE and SMILES

- Live healthy** 健康的な人生を応援します
- Own your personal health** 疾病予防を支援します
- Value an amiable, cordial atmosphere** いかなる暴言・暴力も許しません
- Ensure effective medical services** 安心・安全で効果的な医療を目指します
- Accelerate good work practices** 働きやすい職場環境を促進します
- Nurture quality hospital management** 健全な病院運営をします
- Demonstrate partnership with local medical services** 地域医療と緊密に連携します
- Secure safety first** 安全を最優先します
- Minimize adverse events** 副作用や合併症を最小限にします
- Invest in staff education** 優秀で国際的な医療者を育成します
- Lead in life expectancy results** 人命を尊重します
- Engage and care for patients** 相手の心情に寄り添います
- Surpass expectations** チーム医療をおこないます

CONTENTS

- P.2** 診療科紹介 整形外科の紹介
- P.3** 診療科紹介 当センター精神科・心療内科の紹介
- P.4** 診療科紹介 神経内科紹介 -act F.A.S.T-
- P.5** 職場紹介 ME管理室
- P.6** 職場紹介 診療情報管理室紹介
- P.7** 職場紹介 9A病棟
- P.8** 職場紹介 9B病棟
- P.9** がん看護専門看護師の活動紹介
- P.10** 栄養管理室の取り組み -ワゴンサービスについて-
- P.11** 「質保証」の必要性について
- P.12~13** 第9回 呉国際医療フォーラムを開催して
- P.14** 討議風景写真集
- P.15** 当センターとインドネシア・ウダヤナ大学、およびベトナム・ホーチミン市大学医療センターとの姉妹縁組締結について;当センターの国際化に向けた動向
- P.16** 「肺の日」記念 市民公開講座を開催して
- P.17** 「病院見学会・インターンシップ」を開催いたしました
- P.18** The 17th Annual Pediatric Meeting of National Child Healthに参加して
- P.19** The 17th Annual Pediatric Meeting of National Child Health 2016に参加して
- P.20** うちの部署の接遇キラリさん
- P.21** 第5期のモデルナースを紹介します。
- P.22** 第51回 学校祭を振り返って
- P.22** 呉国際フォーラム(K-INT)の司会を終えて
- P.22** スポーツ交流大会に参加して
- P.23** 病診連携 医療法人 なだ会 きむら内科消化器科クリニック
- P.24** 平成29年度 看護師・助産師募集・編集後記

診療科

紹介



整形外科の紹介

整形外科科長 濱田 宜和

整形外科は、スタッフ8名レジデント1名の9名で診療を行っています。スタッフは各々が以下のように専門分野を持ち、その分野のリーダーとして専門性の向上をはかるだけでなく、他分野にもアシスタントとして参加して整形外科全般の医療の質の向上に努めています。また、週2回のケースカンファレンスで手術方法など患者さん個々の最適な治療法の検討と最終決定を行っています。



<専門領域と担当医師>

①骨・軟部腫瘍（良性・悪性）：下瀬、藤森 当科は、全国に網羅された骨軟部腫瘍診断・相談担当施設であり、中国がんセンターとして、広島県下全域からの患者を受け入れ治療しています。常に最先端の診断および治療を提供することを使命と考え診療にあたっています。

②手外科：蜂須賀 手の外科は、日本の手の外科のパイオニアである「広島大学手外科診療」を受け継いでおり、骨折手術、再接着、腱形成術、複合組織移植などで安定した手術成績を残しています。特に高齢者の転倒事故で多く見られる橈骨遠位端骨折に対して当科蜂須賀医師の考案した人工骨ブロックを利用した骨接合術は好成績を残しています。

③脊椎・脊髄外科：濱崎 平成20年に顕微鏡を使用する最少侵襲手術を導入し、従来であれば脊椎固定術が必要であった患者さんに対して、骨・関節を可能な限り温存する術式を取り入れており、このことが患者さんの早期離床ひいては早期退院を実現しています。

④関節外科：濱田、泉田、森、大川 関節外科は、慢性疾患とスポーツ傷害に二分され、前者には人工関節置換術や矯正骨切り術が、後者には関節鏡による靭帯形成術や半月板手術が行われています。平成21年に導入した関節鏡による靭帯形成術や半月板手術の成績は良く、徐々にですが手術件数が増加してきています。また、平成24年4月に設立した「呉人工関節センター」では、人工関節置換術に新しく「navigation system」と「no drain, no suture」法を取り入れ良好な成績を収めており、人工関節センターの年間実績を基に、毎年市民公開講座を開催し好評を得ています（末尾に詳細を紹介します）。今後もさらなる質の向上を目指して治療していきます。

⑤リウマチ・関節外科：濱田 当科では、平成19年に関節リウマチ患者の治療に生物学的製剤を導入することにより、さらに専門的な診療が必要になったため、平成

23年4月からリウマチ・関節外科診療を新たに開始しました。生物学的製剤を導入して薬物療法は格段に進歩したものの、罹病期間の長い患者は手術の治療が必要なことも多く、人工関節置換術や関節形成・固定術も併せて行っています。また、関節リウマチに関連する膠原病患者も増加してきたため、「リウマチ・膠原病科」を平成24年4月に立ち上げ、広島大学の応援を受け週2日、半日ずつですが（月曜午後と木曜午前）、専門医による治療を行っています。現在呉地区にリウマチを専門とする基幹病院はなく、将来的に当院が呉地区のリウマチセンター的役割を果たせるよう最先端治療を行っています。

専門外来診療は曜日が決まっています。専門外来の曜日と担当医については病院ホームページをご参照ください。

<呉人工関節センター>

<スタッフ>

整形外科 科長 濱田 宜和
整形外科 人工関節センター長 泉田 泰典
整形外科 医師 森 亮
大川 新吾

<診療活動>

呉人工関節センターは平成24年4月に設立され、これまでに300例以上の患者さんに人工関節置換術を施行してきました。呉人工関節センター設立前と比べると、様々な点で改善策が行われています。

まず術前には、デジタルテンプレートシステムを用いることで、より正確な術前計画が行えるようになり、患者さんの骨の形状に合わせた人工関節設置位置や骨切り角度が選択できるようになりました。さらに、術中ではナビゲーションシステムを使用することで、術前に計画された通りの骨切り角度や骨切り量を再現できるようになり、精度の高い手術が行われるようになってきました。これによって、患者さんにはより安心して人工関節置換術を受けて頂ける環境が整うようになってきました。

これらに加えて、手術中に出血した血液を回収して、ろ過した後に体内へ戻す術中回収血の使用によって、献血で頂いた血液を輸血することなく、患者さん自身の血液だけで手術が十分に行えるようになってきました。

また人工膝関節置換術では、「no suture, no drain」という当センター独自の手術創の閉鎖方法を用いており、この方法によって術後早期からシャワー浴が可能となり、手術を受けた患者さんからは高評価を得ています。さらに術後出血量も格段に減少させる効果もあり、メリットの多い方法であることも確認されました。

当センターでは、安全で質の高い医療を提供できるように、今後も診療に改善策を加え、これらの成果を毎年秋に開催している呉人工関節センター市民講座の場で、呉地区の市民の方々に情報発信していきます。

診療科

紹介



当センター精神科・心療内科の紹介

精神科科長・副臨床研究部長 竹林 実

1) 当科の特色

当科は厚生労働省の精神政策医療の専門医療施設であり、広島県精神科救急医療システムの支援病院です。県南部（呉・東広島・竹原地域）で唯一精神科の入院施設を有する「総合病院」です。当精神科では、精神科医師、看護師、薬剤師、臨床心理士、作業療法士、精神保健福祉士が連携した「チーム医療」を行っています。こころの病気だけでなく、身体疾患をもつ患者さんの身体とこころの病気の治療を同時に行っています。臨床研究部（精神神経科学研究室）との連携による脳科学の最先端の情報やエビデンスに基づいた薬理学的な知見を生かしながら診療を行っています。

2) 対象疾患

気分障害（うつ病、躁うつ病）、統合失調症、神経症（パニック障害、強迫性障害、社交不安障害など）、認知症、児童・思春期疾患、てんかん、一酸化炭素中毒後遺症など

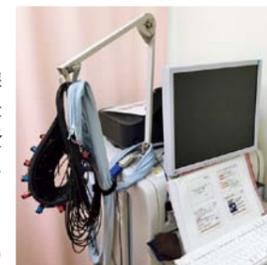
3) 検査・治療方法のご紹介

一般検査

画像検査は、断層写真として頭部MRI、CT、また脳血流を測定するSPECT（e-ZIS画像：アルツハイマー型認知症の早期診断解析方法）を行っています。MRIは断層写真のほか、VSRAD（アルツハイマー型認知症の精密検査）からアルツハイマー型認知症の初期から診断ができます。レビー小体型認知症、パーキンソン病の診断の決め手となるダットスキャン検査、MIBG心筋シンチグラフィ検査も行っています。他に、種々の心理検査（知能検査、性格検査など）を行っています。髄液検査を、認知症・脳炎などの鑑別診断の補助検査として、国立精神神経医療研究センター病院で研修を受けた医師が指導の下に、当科では行っています。

光トポグラフィー（NIRS）検査

平成28年3月から当センターにおいて保険診療で検査が行えるようになりました。図のように装置を頭部に当て、脳を働かせる課題を行う際の脳の血流量（ヘモグロビン濃度）の変化を近赤外光を用いて測定します。検査自体は通常20分程度で終わります。うつ症状の原因となるうつ病（大うつ病性障害）、躁うつ病（双極性障害）、統合失調症の病気の診断の補助検査です。ただし、この検査のみで診断・治療方針は決定せず、検査結果は他の多くの情報と併せ、総合的に判断する際の臨床情報の一つとして活用されます。



光トポグラフィー(NIRS)検査

短期行動活性化療法「クレ・アクティブ（Kure-Active）」

行動活性化療法は、憂うつな気持ちを維持させる行動を見直す方法や、適切な対処方法を学んでいき、気分をコントロール（自己管理）できるようにする治療法です。当院では、うつ病、適応障害の患者さんを対象に、「クレ・アクティブ（Kure-Active）」という名前のグループセミ

ナー（集団行動活性化療法）をおこなっています。グループセミナーでは、参加者の皆さんが、スタッフと一緒に気分の落ち込みや意欲の低下に対しての対処法を学んでいきます。参加者の方数名に、スタッフ2・3人がついて、ワークシートなどを活用しながら、問題の解決策を考えていきます。

4) 先端医療

電気刺激療法（ECT）

最新のパルス波治療器を使用し、苦痛の強い重症うつ病などの迅速な治療には最も効果的な治療手段の一つです。当精神科では全例、麻酔科の協力のもと麻酔をかけて行う「修正型電気けいれん療法」という方法で実施していますので、安全性が高く、副作用が極めて少ないことが特徴です。方法が改良され、けいれんは生じないため、過去の電気ショックとは異なるものです。主として気分障害（うつ病、躁うつ病）、統合失調症、パーキンソン病を対象に当科では年間500件以上行っており、高い改善率を示しています。

治療抵抗性統合失調症治療薬 クロザピン

クロザピン（商品名：クロザリル）は、今まで複数の抗精神病薬による治療を受けてきたにもかかわらず、症状が十分に良くならなかった統合失調症の患者さんに対して、効果があることが世界で唯一認められた薬です。日本では2009年から新しく使われ始めたばかりで、『好中球減少症』や『無顆粒球症』という副作用が起きる可能性があるため、決められた基準を満たした病院・医師でないと処方できないようになっています。当科でも治療を行っています。

磁気刺激療法（TMS）および経頭蓋直流刺激法（tDCS）

麻酔の必要がなく、より侵襲性が少ない簡便な頭部への磁気刺激療法、経頭蓋直流刺激法などについては海外ではうつ病の治療などに用いられており、マスコミでも報道されています。

実用化への準備を当精神科で始めています。TMSおよびtDCSについては治療機器は導入され（写真参照）、TMSのうつ病への応用には当センターの倫理委員会では承認済みで、準備をすすめています



磁気刺激療法（TMS）

5) 治療診療実績

治療診療実績

診療成績	2013年	2014年	2015年
のべ入院患者数	14,013人 (1日平均38.4人)	14,923人 (1日平均40.9人)	14,688人 (1日平均40.1人)
のべ外来患者数	23,467人 (1日平均96.2人)	22,938人 (1日平均94人)	23,037人 (1日平均94.8人)
新患者数(院内紹介含む)	1,115人	1,065人	1,179人
電気けいれん療法(ECT)件数	510件	478件	572件
精神科作業療法件数	3,359件	5,019件	5,427件

診療科 紹介



神経内科紹介 —act F.A.S.T—

神経内科科長 鳥居 剛

神経内科は、内科の一部門で脳・脊髄から、末梢神経、筋肉に至る経路の全てを診る診療科です。神経は全身に張り巡らされているため、症状も多彩です。しびれ、マヒ、めまい、頭痛を訴えて受診される方が多く、代表的な疾患は脳卒中で、当院でも入院患者数のおよそ6-7割を占めています。特に脳卒中の場合、症状が出たらすぐに病院に行きましょう。腕が上がらない、顔が歪んでいる、しゃべりにくい、言葉が出ない、歩きにくいといった症状が急に出た場合は、すぐに病院を受診しましょう。脳の血管が詰まる脳梗塞であれば、症状が出て4時間30分以内に詰まった血管が通るような薬剤(アルテプラゼ)を注射することにより、劇的に症状が改善する可能性があります。当院では2016年以降??の患者さんにアルテプラゼによる血栓溶解療法を行い、良好な結果を得ています。アルテプラゼ治療ができなくても、脳外科医と連携してカテーテルで血栓を回収するような治療も可能です。たとえ4.5時間を過ぎても、脳卒中の治療は早ければ早いほど症状が改善しやすいです。顔、腕、言葉、時間(FAST:Face, Arm, Speech, Time)と覚えて、すぐに受診できるようにしましょう。気をつけたいのは、麻痺やしびれにくさが一時的ですぐに改善する場合があります。このような状態を一過性脳虚血発作と呼びます。脳の血管が一時的に詰まったため症状が出現し、自然に開通するため症状が消えてしまいます。治ったからといって安心してはいけません。一過性脳虚血発作を認めた場合は本格的な脳梗塞を発症する確率が高いため、昼夜を問わずすぐに病院の救急外来を受診しましょう。脳梗塞に準じて入院、検査を行います。一度脳梗塞を起こしてしまった方や、心筋梗塞、心房細動という不整脈で血液をサラサラにするお薬を飲んでいる方は医師の指示通りに正確に服用することで再発が予防できます。当院の入院で扱う脳疾患は、このほか認知症、パーキンソン病、脳炎・髄膜炎、てんかんなどが多く、脊髄や末梢神経疾患では自己免疫性疾患を多く扱っています。パーキンソン病や認知症の診断にはMRI検査だけでなく、アイソトープを用いた検査で脳血流や脳機能を評価し診断精度をあげています。筋疾患も筋ジストロフィーや自己免疫性の筋疾患など様々な疾患があります。当院では広島

県でも数少ない神経病理を専門にする医師が在籍しており、必要に応じて神経や筋肉を取り出して調べる検査を行っています。

外来診療では頭痛、めまい、しびれ、物忘れといったありふれた症状の方もたくさん受診されます。カーブの誇る菊池内野手のように守備範囲の広い診療で、皆様の安定した生活に貢献したいと考えております。



図1 F.A.S.T 急に顔、腕、言葉の異常があれば、すぐ119番通報しましょう。

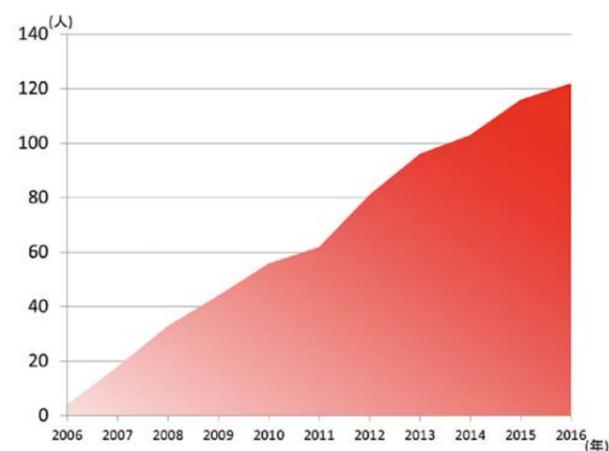


図2 当院のt-PA療法施行数(累計)

職場 紹介

ME管理室

臨床工学技士長 原 和信



臨床工学技士の所属名は各施設において異なり、例えばMEサービス部であったりMEセンター、CEセンター、臨床工学科、臨床工学室など様々な呼び名があり統一したものが全国的にもありません。当院ではME管理室と呼称されていますが、今回そのME管理室における臨床工学技士の業務を紹介します。

スタッフは臨床工学技士10名、事務補助員1名の計11名で各業務に臨んでいます。業務は大きく分け以下のように臨床業務と保守点検業務に分かれます。

【臨床業務】①手術室：心臓血管外科における人工心肺、自己血回収(整形外科も含む)。脳神経外科、整形外科、耳鼻咽喉科術中における各神経モニター測定など②透析室：血液透析を中心とした各種血液浄化③心臓カテーテル室：検査や治療でのポリグラフ操作、各種圧測定、IVUSでの血管径測定、ロータブレーター操作やショック時などに使用する補助循環装置(IABP,PCPS)操作、そしてペースメーカ挿入や交換時における閾値測定など



④高気圧酸素治療室：各種疾患における高気圧酸素治療と潜水員耐圧能力検査⑤病棟、外来：循環器外来における定期ペースメーカチェック、生理検査室での心エコー下チェック、9B病棟での末梢血幹細胞採取、6B病棟でのラジオ波焼灼⑥RI室：心筋シンチにおける血圧、心電図測定⑦アンギオ室：脳神経外科での脳内酸素飽和度測定や抗凝固剤効果の測定であるVerifyなど多岐にわたっています。

【保守点検業務】中央化されている機器は輸液ポンプ(298台)、シリンジポンプ(183台)、人工呼吸器(48台)、低圧持続吸引器(24台)、保育器(15台)、除細動器(17台)、AED(19台)、血液ガス装置(7台)、体外式ペースメーカ(7台)、電気メス(22台)、麻酔機(8台)、血液浄化装置(10台)、ベットサイドモニター(155台)、送信機(95台)、など12機種908台であり当院独自のME管理ソフトSEIAシステムを駆使し日々管理を行っています。また使用後の日常点検、定期的な年次点検に加え故障時においても可能な限り部品を発注しMEにて修理を行っています。以上簡単にME業務を紹介しましたが、基本的には臨床業務の合間に保守点検業務を行っている状況です。

最後に医療機器安全使用のための取り組みとして、呉医療センターニュースの中に医療機器安全ニュースを掲載(年2回)し、中央管理機器の注意点や故障時の対応などを分かりやすく解説しています。また、ME機器安全使用に関する研修会も年10回程度行い、実技なども取り入れ事故に繋がらないよう企画しています。



職場
紹介

診療情報管理室紹介

診療情報専門職 松古富美子



診療情報管理室は昭和44年(1969年)から「Cセンター」として医療センターの皆様から呼ばれてきて、現在 診療情報管理士8名・医師事務作業補助者(MC)19名・事務助手3名で多彩な業務を行っています。

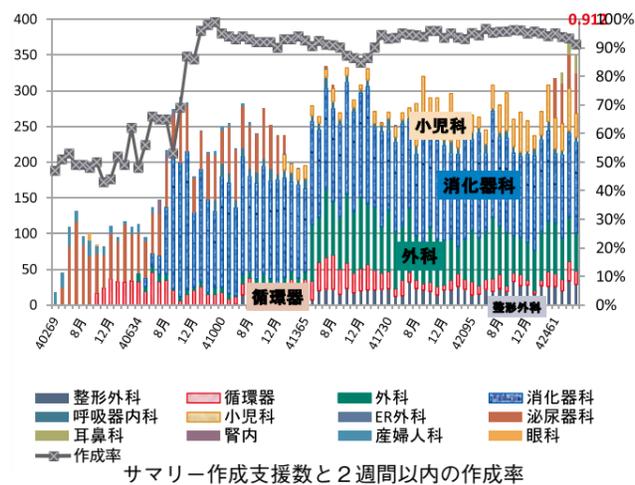
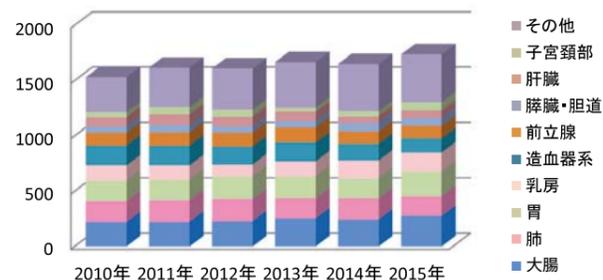
平成28年度診療報酬に関して、「DPC病名コーディング」という実施された医療行為が適正な病名で評価されるように医師がつけた病名に関して情報提供し、診療報酬改定の時期には各診療科への説明を行い、病棟説明会には企画課(医事)と共に伺いました。情報交換を密にすることで平均在院日数短縮等へ舵をきる変更がされた時などは診療情報管理士としてのやりがいを感じています。また、がん診療連携拠点病院として院内がん登録の実務者も初級から中級者を多教育し登録の精度向上につとめています。2015年診断症例は1,733件でした。

CセンターのMCはサマリー作成支援、診断書作成支援、紙文書のスキャン業務等で他の職場の方々関わっています。サマリー作成支援は2011年4月にMC一人で開始し、今では全退院患者の約20%を占めるようになりました。そして医師の方々へ早めに連絡を取るようになり退院2週間以内の作成率90%を達成しています。引き続きよろしくお祈りします。診断書作成支援も患者家族へ2週間以内に渡せることを目標にしています。紙文書のスキャン業務では毎日1000枚以上の文書について、患者間違いやオーダー間違いが無いか確認するという地道な作業を4人で行っています。



静かに仕事しているCセンターです。

診療情報管理士、MCみんなで日々の診療情報管理の精度向上をはかり、そのデータを積み上げてきています。職員の方々からいろいろなデータ抽出の依頼に応えることも診療情報管理室の大きな役割と考えていますので、どうぞ声をかけてみてください。



職場
紹介

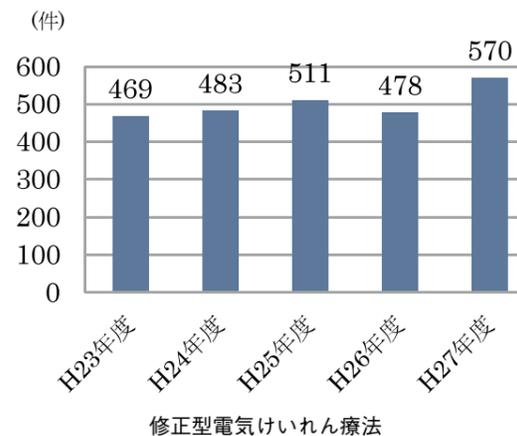
9A病棟

9A病棟 看護師長 小川 佳子



【病棟の特徴】

9A病棟は、定数50床の精神科病棟です。総合病院の中の精神科病棟として、地域の精神科病院と連携し、身体合併症のある患者、修正型電気けいれん療法を受ける患者、認知症精査目的の患者等を受け入れています。修正型電気けいれん療法は、年間およそ500件を実施しています。



【看護の特徴】

看護師には精神看護と同時に身体疾患の看護が求められる、コミュニケーション技術と共に幅広い知識と技術が必要です。精神科の医師だけでなく、各科の医師や専門チームや専門病棟と連携をとり、患者さんに必要な治療や看護が提供出来るように、スタッフ一同努力しています。

毎週火曜日にはソーシャルワーカーと共に退院支援カンファレンスを行い、入院時より退院の目標を設定し、家族を含めた支援を行っています。

また、毎週水曜日には多職種との合同カンファレンスを行い、治療方針や情報共有するとともに、入院形態や、行動制限を最少にするよう検討を行っています。その他に、担当栄養士とも情報交換し摂食障害、低栄養の患者さんの治療のみでなく、患者さん個々に応じた食事が提供できるようにしています。

入院をされている患者さんに対しては、看護師が中心となって企画、運営をする、お花見会、七夕会、お月見会、クリスマス会等、季節感を取り入れたレクリエーションは、患者さんの社会性を養うと共に、気分転換にもなっています。



レクリエーション

職場紹介

9B病棟

9B病棟 看護師長 片岡 悦子



<病棟の特徴>

9B病棟は定床50床(含クリーンルーム8床、放射線科治療室1床)で、血液内科を主とした、放射線治療科と消化器内科の混合病棟です。



写真1 病棟スタッフ

平成16年から骨髄及び臍帯血バンク認定病院に指定されており、主に、白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄種の患者さんが入院しています。治療は、抗がん剤投与による化学療法やステロイド療法、造血幹細胞移植等(図1)が行われています。また、消化器疾患に対する抗がん剤治療や検査も行っています。

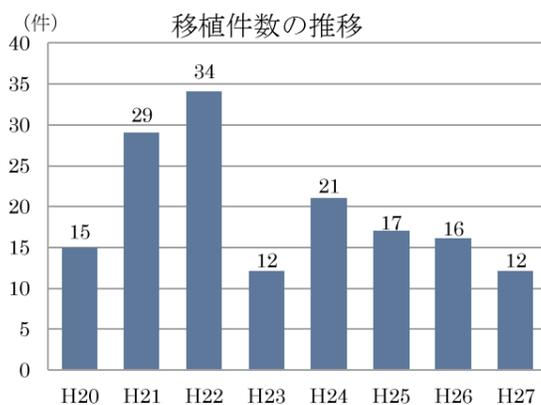


図1 造血幹細胞移植件数

<看護の特徴>

「患者さんに、安全で安心できる看護を提供する事が出来る」を目標に日々看護しています。患者さんのニーズに合わせた看護ケアを提供し、患者さんと家族に寄り

添った看護ができるように努めています。

クリーンルームでは、入院中の筋力低下防止と治療等に対するストレスの緩和を目的として、毎朝、患者さんとスタッフが一緒にラジオ体操を行っています。



写真2 朝のラジオ体操

又、毎週月曜日には血液内科医師、看護師、薬剤師、臨床心理士、理学療法士を含め多職種との合同カンファレンスを行っています。治療方針・看護ケア・リハビリ等について情報共有し、よりよい治療・看護の提供に努めています。



写真3 合同カンファレンス

がん看護専門看護師の活動紹介



10A病棟 看護師長 奥田 真由美

私は平成25年のがん看護専門看護師の資格を取得し、今年で3年目となります。がん看護専門看護師にはがん患者さんの身体的・精神的な苦痛を理解し、患者さんやそのご家族に対してQOL(生活の質)の視点に立った水準の高い看護の提供が求められており、役割として「実践」「相談」「調整」「倫理調整」「教育」「研究」があります。今回は専門看護師の役割のうち「実践」「相談」「教育」についての活動をご紹介します。

私の現在の主な活動場所は、自身が師長を務める緩和ケア病棟です。私たち看護師は、身体的・精神的・社会的・スピリチュアルな苦痛を抱えたがん患者さんができる限り苦痛なく穏やかに、その人らしく過ごすことができるよう、また患者さんと同様もしくはそれ以上の苦痛を抱えているご家族も含め支えることができるようケアをさせていただいています。患者さんやご家族に苦痛をもたらしている要因は一つではありませんが、まずその中でも大きな要因となっているものは何なのかを、病態を元に全身状態の観察をしたり話を聴いたりするなかで予測し、医師や看護スタッフらと情報共有し、できるだけ早く苦痛やその要因に対して介入するようにしています。また、患者さんやご家族へのケアをさせていただくなかで、看護スタッフは「どうしたらいいのかわからないのか」「あれでよかったのか」と何度も立ち止まり悩むことがあります。そのような時、私はまずスタッフの話を聞き、思いを共有し、「あなたが行ったケアでいいんだよ」と伝えるようにしています。そして、患者さんとご家族が歩んでこられた過程を大切にしたいと、患者さんとご家族に対して今できること、また今後必要となる看護の視点についてスタッフと一緒にケアの方向性を考えるようにしています。多くの患者さんとご家族は緩和ケア病棟での療養を希望される際に、「できるだけ痛みなく過ごしたい」と思いを話してくださいます。その思いに添うことができるよう、今後も病棟スタッフと共に日々自己研鑽を積んでいきたいと思っています。

病棟外の活動としては、院内外の看護師や看護学生にがん看護に関する研修や講義を行い、看護の質の向上を

目指しています。そして、緩和ケア病棟オープンデイやメディカルフェスタ、市民公開講座などの機会を活用することで、市民の方々にもがん看護や緩和ケアについてもっと知っていただけるよう努めています。

がんは今や日本人の2人に1人がかかる病気だと言われています。呉市は今後より一層高齢化も進んでいくと予測され、がん患者さんのなかには、がん以外の病気も抱え生きていく方が増えていくと思われます。私は、がん看護専門看護師として目の前の患者さんとご家族のQOLを大切にしたい看護を行っていくのはもちろんのこと、院内外の多職種との連携を強め、患者さんが住み慣れた地域で病気を抱えながらもその人らしく生きることを支援できる1人になればと思っています。



ボランティアによる生け花



スタッフとの情報共有



栄養管理室の取り組み —ワゴンサービスについて—

栄養管理室 主任栄養士 宮武 志帆

栄養管理室では月に1回、緩和ケア病棟においてワゴンサービスを実施しています。ワゴンサービスは平成20年から開始し、毎月調理師がレシピを考案し、手作りのデザートを提供しています。手作りのデザートは調理師と栄養士が患者さんのお部屋に伺い、直接配膳させていただきます（写真1）。できるだけ旬のものを使用したり、季節感を感じられる内容のデザートにしています。メニューの例としては、桃のプリン、クリームチーズケーキ、パイナップルアイス、ヨーグルトムース、甘酒ゼリー、いちごのシャーベット、栗のムース、バスケットゼリー、わらびもちなどがあります（写真2）。年々デザートメニューも豊富になり、現在

では60種類を超えています。患者さんからは「食欲がなくてもこれなら食べられた!」、「季節を感じられて嬉しかった」、などのご意見を直接いただいたり、また紙にメッセージを書いてくださる患者さんもいらっしゃいます（写真3）。またご家族より「病気であまり食べられない姿をずっと見てきたので、一口でも食べている姿が見られて嬉しかった」とお言葉をいただくこともあります。患者さんやご家族からのお言葉や嬉しそうに食べてくださる姿は私たちにとってこれ以上ない喜びになります。患者さんたちからいただいた喜びを糧に少しでも患者さんを楽しんでいただける食事を目指し、今後も栄養管理室一丸となって頑張っていきたいと思っています。



写真1 ワゴンサービスの風景

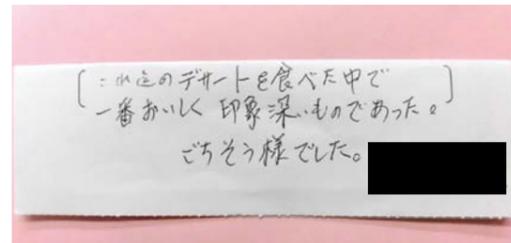


写真3 患者さんからのメッセージ



写真2 メニューの一例



「質保証」の必要性について

臨床検査技師長 仲野 秀樹

近年、臨床検査は「迅速性」に加え「質保証」を重視する安全性の時代に移ってきました。

この潮流は臨床検査だけではなく、あらゆる分野で「質保証」を社会へ公開する時代となりました。

では、臨床検査の「質保証」とはどういうことなのでしょう。

病院といっても、それをビジネス・産業と考える点では、いろいろな商品を販売している量販店やデパートと比べると違いがあるわけではありません。顧客が必要としている品を求め、その中でもより質の高い、保証された品を買おうとするのは、病院の検査結果であっても、求めることには変わりありません。

そのように考えると臨床検査も患者さんの満足度を向上させ、病院がその地域にあって望まれ、開かれた病院として運営されるには「質保証」が必要なのです。

そのために、私たち臨床検査技師は日頃から内部精度管理を検証し、積極的に外部精度管理調査、精度管理向上研修会に参加しています。また、他施設と情報を共有しながら、スタッフ全員が自己啓発を心掛け、継続的な努力を行ってきました。

その結果として、日本医師会、日本臨床衛生検査技師会、広島県医師会の外部精度管理においても、毎年、高い評価を頂き続けています（図1）。

ただそれでもなお、スタッフ全員が現状に満足せず、日本臨床衛生検査精度保証認証施設（図2）として、さらなる「質保証」の向上に努め、永遠のテーマである「医療の質向上への貢献」に全力で取り組んでいきたいと考えています。

表彰状

独立行政法人国立病院機構
呉医療センター・
中国がんセンター 殿
貴施設は第43回広島県臨床
検査精度管理調査において
優秀な成績を取られました
よってここに表します

平成28年3月21日

一般社団法人
広島県医師会
会長 平松 恵
臨床検査精度
管理推進委員会
委員長 横崎 典哉

図1 広島県医師会表彰状

精度保証施設認証書

第15-0302号

独立行政法人 国立病院機構
呉医療センター・中国がんセンター 殿

貴施設が提供する臨床検査値は 標準化され
且つ精度が保証されていることを証する

認証期間

自2015年4月1日～至2017年3月31日

2015年4月1日

Japanese Association of Medical Technologists
一般社団法人日本臨床衛生検査技師会
会長 宮島 喜文
Japanese Committee for Clinical Laboratory Standards
特定非営利活動法人日本臨床検査標準協議会
会長 高木 康

図2 日本臨床衛生検査精度保証認証施設承認書



第9回 呉国際医療フォーラムを開催して

呉国際医療フォーラム事務局 事務局長 山下 芳典
スタッフ 岸田 直子

呉国際医療フォーラム（K-INT）とは、年に一度、当センターで開催される国際学会です。毎年、近年の医学の進歩に焦点を当てたテーマを決めてアジアを中心とする国々から専門家を招きます。参加者同士の討論や交流を通じて、呉地区の医療レベルの向上に寄与しています。

今年で第9回となるK-INTは平成28年7月21日から24日の4日間にわたり盛大に開催されました。今回のテーマは「Current Standards and Future Challenges ～標準治療と先進医療～」でした。海外からは、タイを始め、インドネシア、シンガポール、マレーシア、韓国、台湾、ベトナムそしてアメリカから29名のゲストが参加し、真剣な討論と情報交換、そして心温まる交流が行われました。

まず21日に、海外からのゲストを対象に、当センター（外来棟、病棟、経営企画室）と呉技術研修センターの見学ツアーを行いました。当センタースタッフが、各部署の特長や業務を英語で紹介しました（写真1）。昼食に呉市街を一望する11階の食堂でビュッフェを楽しんだ後、折り紙体験もありました（写真2）。先日アメリカのオバマ大統領が広島を訪問された際に折り鶴を残していたこともあり、ゲスト全員興味を持って鶴を折り、記念にと持ち帰る姿も見られました。

その後、タイの看護師による看護学生向け講義が行われました（写真3）。学生は、英語による講義に緊張しつつも日本と違う医療事情を熱心に学び、講義終了時には充実感溢れる笑顔が見られました。

翌22日のK-INT開会式では来賓として呉市長代理の呉



写真1



写真2



写真3



写真4

市福祉保健部 原垣内清治副部長（写真5）、呉市医師会 原 豊会長（写真6）、広島大学 秀 道広教授（写真7）から祝辞をいただき、谷山清己会長（写真8）が第9回K-INT開会を宣言しました。式の前には、バイオリニスト 内山優子さん、付属看護学校の学生および音戸の舟唄（呉の伝統文化）保存会による祝賀イベントが開催され（写真9）、会場はゲストへの温かい歓迎ムードに包まれました。

22、23両日に開催されたシンポジウムでは、院外から東広島医療センター 下田浩子先生（写真10）、広島がん高精度放射線治療センター 権丈雅浩副センター長（写真11）を座長としてお迎えし、当センターから精神科および臨床研修部 板垣圭先生、外科および臨床研修部 檜井孝夫先生、小児外科 鬼武美幸先生が専門分野での標準治療と先進医療について、最新の知見を発表されました（発表順）。

24日には会場を宮島に移し、看護学生を含む参加者が次回K-INTの構想についてディスカッションを行いました。次回は第10回ということもあり、記念となる行事の



写真5

写真6

写真7

写真8



写真9

企画が期待されます。

21～23日に関連行事として企画された計4回のセミナーでは座長：当センター 檜井孝夫先生（写真12）のもと、県立広島病院 篠崎勝則先生（写真13）、座長：当センター 山下芳典先生（写真14）のもと、倉敷中央病院 奥村典仁先生（写真15）、座長：広島大学大学院 田邊和照准教授（写真16）のもと、がん研究会 有明病院 布部創也先生（写真17）、および座長：当センター 中野喜久雄副院長（写真18）のもと、大阪市立総合医療センター 武田晃司先生（写真19）にそれぞれ講演をしていただきました（講演順）。呉医療センターは地域がん診療連携拠点病院でもありますので、各セミナーを通じてがん診療に非常に有用な情報を発信でき、有意義なフォーラムとなったことを事務局として嬉しく思います。

23日には、当センターと海外の医療施設との姉妹提携を披露する式典が開催され、当センターの国際交流を紹介することができました。これについては今号別記事で紹介しますのでそちらをご覧ください。

K-INTの大きな特徴の一



写真10

写真11



写真12

写真13

写真14

写真15



写真16

写真17

写真18

写真19

つとして、看護学生の活躍が挙げられます。例年同様、司会進行は看護学生が英語で行いました。医学専門用語の中には発音することさえ難しい単語がたくさんありましたが、練習の成果を発揮した流暢なアナウンスはゲストに好評でした。また看護学校茶道部によるお茶会など、K-INTを華やかに盛り上げるイベントも開催されました。お茶会には色鮮やかな浴衣を身に纏った外国人女性ゲスト（写真20）も参加し、その表情は笑顔に溢れていました。

当センターは医学教育に関わる看護学校や呉医療技術センターが併設されており、呉における医療レベル向上の場、いわば教育の拠点です。この教育の一環として、多くのボランティアに支えられた国際学会を主催することは、第一線で稼働する臨床病院では他に類を見ない画期的でユニークな試みです。近年、他の国立病院機構が同様の学会を主催する動きがあり、歴代K-INT会長の先見の明、そして第9回を迎えたという重みを感じます。これまでの良き伝統を踏襲しつつ、新しいチャレンジを取り入れ、第10回（平成29年7月13日～16日）はより有意義なフォーラムになるよう鋭意企画します。テーマは決まり次第発表します。K-INTは皆さんに開かれた当センターの一大イベントです。今回参加されなかった方には、来年はぜひ参加して、楽しんで勉強していただきたいと思います。国際交流というと抵抗を感じる方もいらっしゃるかと思います。しかし実際に体験してみると、人と人との交流の基本は万国共通の「笑顔」で、決して難しい事ではありません。

最後になりましたが、K-INT開催にあたり、各部署の方々、ならびに看護学校の先生方と生徒の皆さんのお手伝いにご協力に対し、深くお礼を申し上げます。K-INT事務局では皆さんからの建設的なご意見をぜひ次回の運営に活かしたいと考えています。これからも当センターの国際交流を一緒に盛り上げていきましょう！



写真20

討議風景
写真集



2016.7.21~24 第9回国際医療フォーラム(K-INT)
THE 9th KURE INTERNATIONAL MEDICAL FORUM(K-INT) IN 2016
Team Approach in Modern Medicine



当センターとインドネシア・ウダヤナ大学、
およびベトナム・ホーチミン市大学医療センターとの
姉妹縁組締結について；当センターの国際化に向けた動向

国際交流室 室長 山下 芳典
スタッフ 岸田 直子

2016年7月23日、第9回国際医療フォーラム(K-INT)の会期中に、当センターとインドネシア・ウダヤナ大学との姉妹縁組締結(MoU)披露式典が開催されました。姉妹縁組の内容は事前協議を経てあらかじめ決定しており、両施設代表者(当センター 谷山清己院長、ウダヤナ大学 I Ketut Suyasa教授)のサインと、協定書証人(当センター 山下芳典臨床研究部長、ウダヤナ大学 I Ketut Siki Kawiyana教授)のサインが記入された協定書が代表者(第9回K-INTに参加したKadek Ayu Candra Dewi医師)に手渡されました。記念品として、当センターからウダヤナ大学へ蒔絵の置時計が、ウダヤナ大学から当センターへ記念の盾と学問の神とされているガネーシャの像などが贈られました(写真1)。ガネーシャは人間の体と象の頭、4本の腕を持ったバリ島ヒンドゥー教の神で、学問や財産を司るとされています。

今回締結されたMoUの内容は学術的交流、人的交流、それぞれが企画する学術活動への相互招待および技術や情報の交換などから成っています。さらに、成果の期待される課題については自由に話し合おうということも盛り込まれています。

当センターとしては、平成21(2009)年2月タイ国立ラジャビチ病院、平成22(2010)年8月タイ国クイーンシリキット小児病院、平成26(2014)年7月アメリカ合衆国マサチューセッツ総合病院病理部に次ぐ、4番目のMoUです。他に、ベトナム・ホーチミン市大学医療センター(University Medical Center)とのMoUも双方が締結に合意しており、近日中に協定書が完成する予定です。今回の締結披露式ではその経過も併せて紹介することが出来ました(写真2)。MoUの協定書や記念品は当センター外来棟2階のショーケース(写真3)に展示してありますので、ぜひご覧いただければと思います。

MoUは当センターが確実に国際化を進める土台です。学術的な情報交換やスタッフへの教育に大いに役立っています。当センターの国際交流が、今後ますます発展するよう努めてまいります。



写真1 ウダヤナ大学とのMoU記念品交換
前列左から2人目のMega医師が持たれているのがガネーシャの像です。



写真2 当センター、ウダヤナ大学、UMC関係者記念撮影
ベトナムから来日されたBui医師(前列右から2人目)は、上方の横断幕にあるCurrent Standards and Future Challengesのテーマの下、第9回K-INTで学術発表をされました。



写真3 展示ショーケース
当センターの国際交流の経緯がわかります。



「肺の日」記念 市民公開講座を開催して

副院長 中野喜久雄

本年7月8日に第55回日本呼吸器学会地方会会長を務めさせて頂きました。その一環として8月7日に呉市、呉市医師会、当院の後援を受け、「肺の日」記念の市民公開講座を当院地域医療センターで開催しました（ポスター 図1）。この「肺の日」は、日本呼吸器学会が2007年に8月1日を8と1との語呂合わせで制定しました。その日の前後で毎年開催する市民公開講座は、市民に肺の健康について良く知って頂き、さらに肺の病気の予防と早期発見に心がけて頂くことを目的としています。



図1

開催当日は最高気温が34℃の真夏日であったにもかかわらず、65名の市民の方に御参加頂きました。そして当院臨床研究部長の山下芳典先生（図2）の司会進行で4つの講演が行われた。まず中国労災病院呼吸器内科医長の塩田直樹先生（図3）が「肺炎とはどんな？」の演題名で講演され、日本での肺炎による死亡率の増加、肺炎球菌肺炎が最も多いこと、肺炎球菌ワクチン接種の重要性等を主体に話された。そのワクチン接種に対して市民から多くの質問があり、市民の方の関心の高さがうかがえた。続いて当院の北原良洋先生（図4）が「喫煙者に忍び寄り慢性閉塞性肺疾患（COPD）に



図2



図3



図4

御用心！？～禁煙で目指そう、肺のアンチエイジング～」の演題名で講演された。COPDの増加と早期発見のための医療機関への早期受診さらには禁煙の重要性について丁寧に説明された。次に「肺年齢」の測定を希望者40名に実体験して頂き、測定値について奥本稔先生、三登峯代先生、妹尾美里先生がそれぞれ市民に分かり易く説明された（図5）。



図5

休憩を挟んで講演3は、呉共済病院副院長の塩田雄太郎先生（図6）が「間質性肺炎ってどんな病気？」の演題名で講演された。治療薬の少ない難治性の疾患であるが最近、新薬が開発されたことを説明された。実際に治療中の患者さんから具体的な診断や治療についての質問があった。最後に小生が「造船の町」呉に多いアスベスト関連疾患ってどんな病気？」の演題名で講演を行い、造船がもたらした正と負の遺産、今後のアスベスト暴露に対する市民レベルでの注意点等を説明した。最後まで市民の方が熱心に傾聴と質問をされ、予定終了時刻の午後4時を15分超過し、非常に有意義な市民公開講座であった。



図6

項を終えるにあたり会場の準備と管理を担当して頂いた庶務課の豊田友弘さん、村瀬広治さん、そして事務局担当の医師事務作業補助員の才野かおりさんに深謝致します。



「病院見学会・インターンシップ」を開催いたしました

副看護部長 梶山ナミ恵

平成29年度看護師募集活動の一環として、下記の日程にて病院見学会・インターンシップを開催しました。

病院見学会	
日程	参加人数（名）
3月22日	5
4月16日	6
5月14日	11
6月25日	2
7月9日	7

【病院見学会スケジュール】

- 12:30～13:00 受付
- 13:00～13:30 病院・看護の概況説明
- 13:30～15:00 病院内見学
- 15:00～15:30 意見交換・終了

インターンシップ

日程	参加人数（名）
3月25日	13
4月29日	17
6月11日	6
7月16日	22

【インターンシップスケジュール】

- 9:00～9:30 受付・オリエンテーション
- 9:30～10:00 病院・看護の概況説明
- 10:00～12:00 更衣・病棟案内
看護体験
- 12:00～13:00 休憩
★先輩看護師とランチ
- 13:00～15:00 看護体験
- 15:00～15:30 意見交換・終了

【参加者の感想・意見】

- ・とても充実した時間を過ごすことができました。病棟体験では、看護師の方同士の連携や患者さんとの関わりを見て、とても雰囲気がいいなと感じました。
- ・この病院で働きたいと思う気持ちが強くなりました。
- ・看護師さんと色々な話もできて、楽しく過ごせました。実習では見ることのできない仕事も見れて良かったです。

参加いただいた学生さんは、広島県内の看護学生はもちろん、大分、福岡、山口、島根、鳥取、愛媛、大阪、京都等から多くの学生さんに来ていただきました。今年度はインターンシップをご希望される方が多い傾向でした。皆さん急性期医療に興味ある方ばかりでしたが、不安もいっぱいでした。しかし、病棟や昼食時に看護師と実際に話をすることで不安が軽減したり、当院への興味・関心を強くし、表情を輝かせていました。

昨年の傾向を見ますと、病院見学会・インターンシップに参加してくれた学生の3割は就職に繋がっています。今後も継続して病院見学会・インターンシップを受け入れ、看護師確保に繋げていきたいと思っています。



The 17th Annual Pediatric Meeting of National Child Healthに参加して

小児科 医師 米倉 圭二

2016年6月22日から24日の期間に、タイのバンコクで開催されたThe 17th Annual Pediatric Meeting of National Child Healthに参加させて頂きました。私他、団長を務めて頂きました小児科の原 圭一先生、坂井香奈江助産師、研修医2年目の藤川皓基先生の4名で参加させて頂きました。私としては約10年ぶりの海外渡航で人生初の国際学会への参加・発表ということもあり、緊張感以上に楽しみの方が大きく参加することが決まって以降ずっと楽しみにしてきました。

6月21日、福岡空港から片道約5時間かけて、バンコクにあるスワンナプーム国際空港に到着しました。飛行機を降りるなり、ジメツとした熱気に全身が覆われ、タイに来たことを改めて実感しました。スワンナプーム国際空港の敷地面積は成田国際空港の約3倍で世界最大級の国際空港であり、その規模の大きさや人の多さには圧巻させられました。空港からホテルに着くなり、テュクテュク（3輪タクシー）に乗って夕食を食べに行きましたが、このテュクテュクなる乗り物は、交通量の多いタイの車道を颯爽と走り抜けスリル満点でした。夕食はトムヤンクンや蟹料理などのタイ料理をおいしく頂きました。



その後は、念願でもあった？ニューハーフショーを鑑賞し、その美貌に見とれてしまいました。ホテルへの帰路は翌日の朝刊にも掲載されるほどの激しい雷雨に遭遇し、雨水で氾濫した道路を帰る羽目になりましたが、初日から充実した1日を送ることができました。



6月22日は学会初日でした。開会式に出席し、先天奇形や先天性心疾患のシンポジウムにも参加し、アジア各国から参加されていた先生方の貴重なご講演を拝聴することができました。その後は、ワット・ポーやワット・アルンなどを観光しましたが、慣れない高温多湿の気候

にヘトヘトになってしまいました。ホテルに戻ってからウェルカム・パーティーにお誘い頂き、四国こどもとおとなの医療センターから参加されていた先生方とも交流することができました。

6月23日は学会2日目でしたが、アユタヤ遺跡の観光や象に乗ることもできました。

6月24日の学会3日目は、いよいよ発表です。私の発表させて頂いた演題は、「エンテロウイルスD68型により急性呼吸不全と急性弛緩性麻痺を来した1例」です。この症例は当科で2013年に経験した症例です。エンテロウイルスD68型はあまり聞きなれないウイルスかと思いますが、2015年には日本でも流行し話題となったウイルスです。重篤な呼吸器症状や稀ではありますが麻痺を引き起こす可能性のあるウイルスとして注目されています。人生初の英語での口演発表ということもあり少し緊張しました。質疑応答の際には英語の聞き取りがなかなか難しく苦戦する場面もありましたが、なんとか無事に終了することができました。原先生、坂井助産師、藤川先生も堂々と発表され、発表内容も多く参加者の興味を引いており感心してしまいました。発表後には、学会の主催病院であるQueen Sirikit National Institute of Child Healthの施設見学をさせて頂きました。ICUやNICUなどの見学をさせて頂き、いろいろと参考になる場面がありました。

タイでの4日間は想像していた以上に大変有意義に過ごすことができました。タイは料理が安くてとてもおいしく、国民性はとても穏やかで親しみやすく、また機会があれば行ってみたいと思っています。また、初の国際学会への参加でしたが、現代社会においてグローバル化が強く求められていることの意味を少しではありますが体感することができ、今後の診療に良い影響を与えてくれるものになったと思います。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さいました谷山院長、山下臨床研究部長、世羅小児科科長、国際交流室の岸田様をはじめとする関係者皆様に深謝申し上げます。



The 17th Annual Pediatric Meeting of National Child Health 2016に参加して

臨床研修センター 臨床研修医2年 藤川 皓基

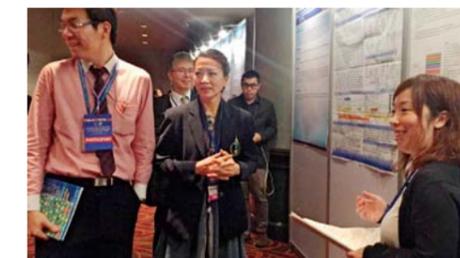
この度、タイの首都バンコクにある小児病院Queen Sirikit national institute of child health (QSNICH) 主催の学会である、The 17th Annual Pediatric Meeting of National Child Healthに参加させて頂きましたので、ここに報告いたします。当院からは小児科の原先生、米倉先生、助産師の坂井さんの4人が参加しました。学会開催期間は2016年6月22日～24日であり、私たちの発表は最終日の6月24日でした。

今回私がエントリーしたのは口演と口演の間にある、Coffee breakの時間に設けてあるポスターセッションでした。「A case of recurrent neonatal group B streptococcal disease associated with breast milk transmission」と題し、母乳から感染したと考えられる新生児GBS敗血症について発表しました。発表が決まった段階で私の学会発表経験は数回しかなく、英語でポスター作製なんて無謀なのではないかと考えたこともありましたが、実際このトピックに関してほとんど日本語の文献がなく、英語の文献を読んで考察を考えて…という作業にとっても苦労した思い出があります。しかし、小児科の先生方のサポートや、谷山院長の「とにかく発表してみることが大事」というお言葉に力を頂き、何とか発表に漕ぎ着けることが出来ました。発表は司会進行役の先生に従って発表していったのですが、タイでは珍しい症例だったようで、発表途中に質問やコメントなども頂きながら非常に活発な討論を行うことが出来ました。

さて、私たちは学会前日からバンコクに入り、市内の寺院や屋台などを巡りました。学会期間中も、タイ語でのセッションの時間帯や夜中などはタイの観光を楽しみました。また23日は病院側主催のツアーで、アユタヤ遺跡などの観光にも連れて行って頂きました。このあたり

を詳しく書くともう1ページ寄稿できそうなので割愛しようと思いますが、タイの混沌とした雰囲気を感じることができ、非常にいい経験をさせて頂きました（個人的にはジャズバー Saxophoneがオススメです。タイで最も古く有名なジャズバーです）。24日にはQSNICHの病院見学ツアーもあり、タイの医療施設の現状を間近に見ることが出来ました。

今回、初の国際学会に参加してみて、自分が想像していた以上に多くのことを経験することが出来たように思います。現在この原稿を書いているのは8月ですが、あの辛かったポスター作製の日々を思い返してみても、今ではいい思い出になっています。谷山院長にご助言頂いたように、何事もまずは飛び込んでみるということの大事さをこの度身をもって学ばせて頂いたように思います。最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった谷山院長をはじめ、今回学会参加するにあたり多くの方にご助力頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



うちの部署の接遇キラリさん



看護部 5A病棟
看護師

岡光 智恵さん

本人のコメント

不安を抱えた患者さんが安心して手術に臨み、術後のリハビリにも臨めるよう、常に笑顔で対応することを心がけています。

職場長からのコメント

5A病棟 徳永 看護師長より
いつも明るく元気よく、笑顔で患者さんやご家族に接しています。とても親しみやすく、安心感があります。



看護部 5B病棟
看護師

長寄 桃子さん

本人のコメント

患者さんやご家族の方々が、少しでも不安無く治療が受けられるよう、笑顔で対応することを心がけています。

職場長からのコメント

5B病棟 早瀬 看護師長より
患者さんやご家族にいつも優しく丁寧に接しています。彼女の笑顔と元気な声は、周囲の皆を明るくしてくれます。



栄養管理室
調理師

藤川 哲児さん

本人のコメント

調理師として、患者さんに安心・安全また満足して頂ける食事の提供を目指し日々一生懸命料理を作っています。患者さんに「美味しい」と言ってもらえたら最高に幸せです。

職場長からのコメント

別府 栄養管理室長より
彼はいつも何事にも一生懸命業務に取り組んでいます。その気持ちが、料理として患者さんに伝わり喜んでもらえる食事の提供ができれば最高ですね。



第5期のモデルナースを紹介します。

☆笑顔キラキラ看護師を紹介します。

3A病棟 尾濱 菜緒

モデルナースのバッジを付けていることで、患者さんからもバッジを意識されることがありました。あまり関わらない他部署のスタッフや患者さんからも、モデルナースとして認識されるため、丁寧な説明や笑顔で接することを心がけ、取り組みました。



〈看護師長からのコメント〉

看護師長 大塚 晴美

いつも笑顔とわかりやすい言葉で患者さんに対応しています。自然と笑顔がスタッフや患者さんに伝わるような、さわやかなモデルナースとして活躍しています。

4B病棟 西 綾乃

私の目標とする看護師は、知識や技術に優れているだけでなく、いつも笑顔で患者さんに寄り添い、患者さんの立場に立って看護をしている先輩看護師です。患者さんが安全・安楽に安心して入院生活を送れるよう、笑顔を大切に、患者さんの少しの変化にも気づけるような思いやりのある看護を提供していきたいです。



〈看護師長からのコメント〉

看護師長 濱咲 真理子

いつも元気で、まわりの雰囲気明るくしてくれています。責任感が強く、患者さんやスタッフからも信頼されています。これからも、後輩のモデルとなるような看護師となるよう期待しています。

4A病棟 山下 成美

患者さんに適切かつ丁寧なケアができ、スタッフ間での情報交換や意見の発信ができる人だと考えます。今年度モデルナースに選ばれてから、より一層その意識を持ち、日々の関わりの中で啓発する事ができたと思います。

新人の頃、患者さんの為なら妥協しない、芯の強い先輩がいました。強い心を持ちながら常に笑顔で絶やさず看護する姿を見て、先輩のようになりたいと思いました。その先輩に少しでも近づけるように、今後も努力したいと思います。



〈看護師長からのコメント〉

看護師長 石井 一枝

いつもニコニコ元気いっぱいの、ママさん助産師です。バッジをつけて、分娩介助や褥婦さんへの指導・外来応援、学生指導にと、より接遇に配慮してスタッフの良いモデルとなっています。今後の活躍にも大いに期待しています。

5B病棟 友木 春菜

患者さんからモデルナースのバッジをみて「さすがだね」と言ってくることが多くあります。なので、その言葉・お気持ちを無駄にしないよう、丁寧な対応を心がけています。また、2期連続ということで、病棟内のスタッフからの期待を裏切らないように、また、一緒に頑張っていける環境になるように努めています。



〈看護師長からのコメント〉

看護師長 早瀬 敏子

モデルナースの病棟内投票で、いつも優しく笑顔を絶やさず仕事に取り組む姿勢や清楚な身だしなみが認められ、2期目のモデルナースとして活躍しています。患者・家族、医療スタッフへの気配りは癒やしとなり、皆が笑顔になることができるので、とても信頼されています。

第51回 学校祭を振り返って

看護学校 2年生 赤瀬 駿

今年の学校祭は、テーマ「The sky is the limit ～無限の可能性～」を掲げ、準備していきました。学校祭当日、天気は雨模様でしたが、約400人の方が来場してくださいました。屋台やバザー、お茶会、手浴・足浴、健康診断など普段学習している看護技術を提供させていただきました。来場していただいた方には楽しんでいただき、改めて地域の方々のご支援にこたえることができたのではないかと思います。そして、学校祭を無事終えることができたのは、企画・運営した学生の取り組みの成果ではありますが、その私達をスポンサーになっていただいた方々をはじめ、沢山の方々が助けてくださったおかげ

であると感謝しています。学校祭を企画・運営することは大変でしたが、仲間との絆を強めることができ、学校祭のテーマでもある呉看護学校の学生として様々な可能性を信じ、成長につなげることができたと思います。



呉国際フォーラム(K-INT)の司会を終えて

看護学校 2年生 梶川 和恵

今年もK-INTで英語の司会を担当させていただきました。医療の専門用語の発音は特に難しく、当日はとても緊張しました。しかし、発表されている内容から国際的な視点にたった医学の動向を知ることができ、大変刺激になりました。また呉医療センターのドクターの方々が、海外からのゲストの方と意見交換される姿を間近に拝見し、私たち看護学生の講義は、すごいドクターの方々に講義をしていただいているのだと実感すると同時に、感謝の気持ちでいっぱいになりました。



友達サポートのおかげで、無事良い形で終えることができました。今年は総合2位でしたが、来年は総合優勝を目指していきます。



スポーツ交流大会に参加して

看護学校 2年生 長合 智華

スポーツ交流大会では、応援団や競技に参加する選手は、大会に向けて一生懸命練習に取り組み、本番では会場にいる人々に感動を与えてくれました。また、選手でない学生は、応援のパフォーマンスをしたり声を出して応援し、呉看護学校の学生が一丸となって大会に参加することができました。普段見られない友達の姿がみられ、また他校の学生と関わることで交流を深めることができました。スポーツ交流大会を開催するにあたって、大会までの準備から当日の運営など、はじめてのことがあり戸惑うことがたくさんありましたが、先生方やまわりの



医療法人 なだ会 きむら内科消化器科クリニック

院長 木村 誠一郎

当院はJR広駅から500m北に入った場所、呉港高校と広高校の間に位置しています。朝の通学時は、当院前の道路は登校する生徒でいっぱいになります。父がこの場所で生まれ育ち、私にとっても思い出深い土地だったのでここを開業の地として選びました。近年、周りには新しい道路が出来るなど開発が進み、のどかだった風景も目まぐるしく変わりつつあります。当院には季節ごとの風物詩があり、春になるとツバメが巣作りにやってきます。今年は、例年より多い三組のつがいに雛が生まれ、元気に巣立っていきました。夏はクマゼミの羽化を見る事ができ、朝はセミの大合唱で目覚める事があります。冬は医院前の木がイルミネーションで輝きます。高所恐怖症の院長ですが、自ら数時間かけて飾りつけをしています。185号線から見ると、真正面にそれを見る事が出来ます。患者さんや通行される方の癒しになればと願っています。

さて当院は、お蔭様で開業15年目に入りました。小さな医療機関ながら遠方からご来院頂く事もあり、頭が下がる思いです。腹痛等の精査のための内視鏡検査を希望され来院される方もありますが、内視鏡のみで解決する事は稀で、他の検査を併用しながら見逃さないよう努め、それでも原因不明の際には、医療センターをはじめ、病院の方に早めに紹介するよう心掛けております。特に医療センターには、個人的に付き合の長い先生方もおられますので、大変心強いです。

私が患者さんと接する上で一番心掛けている事は、「全人的医療の実践」です。学生時代には、「全人的医療を考える会」という会を主催した事もあります。旧「音戸ロッジ」で大会を開き、患者さんの立場に立った

医療をするにはどうすればよいのかなど、徹夜で議論した事は良い思い出です。全人的医療を実践したいという思いで開業しましたので、病気をみるだけでなく、時間の許す限り、患者さんの話に耳を傾け、優しさを持って診療にあたりたいと日々思っております。実際の診療では、反省する事もしばしばですが、初心を忘れず、努力して参りますので、今後ともよろしくお願い致します。



診療時間 (受付時間)	月	火	水	木	金	土
9:00~12:30	○	○	○	○	○	○
15:30~18:30	○	○	×	○	○	×

(休診日 水・土午後、日曜、祝日)

医療法人 なだ会

きむら内科消化器科クリニック

〒737-0141 呉市広大新開3丁目3-50

<http://kimura-med.net/>

TEL : 0823-76-5511

FAX : 0823-76-5500



平成29年度 看護師・助産師募集

わたしたちと一緒に
働いてみませんか。

第4次採用試験日

10月21日(金)

第5次採用試験日

11月21日(月)

第6次採用試験日

12月16日(金)



〈平成 29 年度募集要項 (抜粋)〉

1. 募集職種

看護師 40 名、助産師 10 名程度

2. 応募資格

看護師・助産師の免許を有する方

3. 応募方法

1) 必要書類

受験希望 職種	平成 29 年 3 月 資格取得見込みの方	資格を有する方
看護師	①履歴書 (指定の用紙) ②在学中の養成機関の成績証明書 ③卒業見込み証明書 ④392 円の切手を貼った返信用封筒 2 通	①履歴書 (指定の用紙) ②看護師免許証 (写) ③養成機関の卒業証書 (写) 又は卒業証明書 ④392 円の切手を貼った返信用封筒 2 通
助産師	①上記内容の書類一式 ②看護師資格を有する方は、 看護師免許証 (写)	①上記内容の書類一式 ②助産師免許証 (写)

*書類提出時の留意事項

- 書類提出は、添付・記入漏れのないように注意し、封筒の表に看護職員応募書類在中と朱書きして下さい。
- 郵送の場合は簡易書留にて送付して下さい。
- 学校等の都合により、必要書類の一部が提出期限内に揃わない場合は、その旨を記したメモとそれ以外の必要書類を提出期限内に提出し、不足書類は試験前日までに提出先に届くようにして下さい。
- 提出書類の返却は致しませんのでご了承下さい。

2) 提出先 呉医療センター 人事係

4. 試験内容

- 論文試験 (800 字程度の小論文)
- 面接試験

5. 待遇について

独立行政法人国立病院機構職員給与規程により支給されます。

1) 基本給 (平成 27 年度実績)

- 看護師 初任給 大学卒 200,600 円
短大 3 卒 191,300 円
短大 2 卒 182,900 円

・助産師 初任給 203,400 円

2) 諸手当

- 専門看護手当 (専門看護師 5,000 円、認定看護師 3,000 円)
- 夜間看護等手当、夜勤手当
(準夜、深夜勤務の実績に応じて支給)
(二交代夜勤 1 回当り手当額 概ね 11,000 円)
(三交代夜勤 1 回当り手当額 概ね 5,000 円)
- 業績手当 (年間基本給等の 4.1 月分)
- 住居手当 (借家の場合、最高 27,000 円支給)
- 通勤手当 (55,000 円まで全額支給)

資料請求・問い合わせ

独立行政法人 国立病院機構 呉医療センター・中国がんセンター 管理課 給与係長まで

〒737-0023 広島県呉市青山町 3-1

☎0823-22-3111 (内線 6213)

病院見学会・インターンシップを
随時開催しています。

曜日・時間は希望に応じて調整いたします。申込受付時間 月～金9:00～17:00

<http://www.kure-nh.go.jp/>

E-mail:kangobu@kure-nh.go.jp (看護部)



呉医療センターへご寄付をいただきました。

4/1～6/30の間にご寄付を 呉資源集团回収協同組合 他匿名1名からいただきました。

当院において患者さんのために使用させて戴きます。ありがとうございました。

編集後記

今夏はリオ・オリンピックでのメダルラッシュに日本中が興奮しました。選手達の長年の努力とコーチやトレーナー、栄養士、チームドクターなど多職種にまたがる科学的なサポートが好成績や逆転劇につながりました。これは医療の分野にも通ずるところがあります。本誌では各部署における個々のレベルアップとチーム医療への取り組みを紹介しています。同時に最先端医療を提供するため、海外の著名な研究者を招いた呉国際医療フォーラムやアジアの大学病院との姉妹縁組締結、国際学会発表などの学術活動を報告しています。日夜研鑽を積み、金メダルに値する各部署の活躍ぶりを知っていただけると幸いです。(編集員 H.T.)